学べるゲラ

第27回 具学永の墓石とむくげの会

※2024年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

新年という時の区切りが清新な風を運ぶ。冬の日差しは暖かだった。埼玉県北西部の寄居町中心部にある浄土宗寺院、正樹院。規則正しく並ぶ墓地の中で、ひときわ古い墓石の前に花などが備えられていた。年末から年始にかけて訪れた人がいたのだろう。

正面には「感天愁雨信士」と戒名が刻まれ、向かって右側面には「大正十二年九月六日亡／朝鮮慶南蔚山郡廂面山田里居／俗名　具学永／行年二十八才」とあり、反対側には「施主　宮澤菊次郎／外有志者」とある。

関東大震災（1923年9月1日）の混乱下で噴き荒れた朝鮮人虐殺の暴風。具学永は同寺隣にあった寄居警察署（現在は移転）に保護されていたところを、自警団に襲われ殺害された。

震災50年の73年、畑和（はたやわら）埼玉県知事（当時）を名誉委員長とする朝鮮人犠牲者調査追悼事業実行委員会が全県調査を行った際の報告書「かくされていた歴史」に、遺体を見た医師の証言が収録されている。「ちょびりちょびりやったと見えてひどい傷でした。傷は合計六十二カ所」とあり、惨殺だった。別の目撃者は、瀕死（ひんし）の具が署内のポスターの裏に「自分の血で『日本人、罪なきを罰す』と書きました」と振り返っている（同一の目撃者は別書で「罰、日本、罪無」だったとも証言している）。

朝鮮あめの行商をしていたと伝わる具の生涯を韓国人牧師が3年

前に絵物語「飴売り具学永」として出版。虐殺事件全体を象徴するような「日本人、罪なきを罰す」の言葉とともに具の悲劇は知られるようになり、鹿島正樹住職によると、最近は韓国からの来訪者も珍しくないという。

「具さんの事件は、地元にとっては『かくしたい歴史』なんです」。そう話すのは同町桜沢の木島修さんだ。具の慰霊と、痛みが目立つ墓石の補修を目的に２０２３年春に「むくげの会」を発足させ、没後１００年の命日に当たる同年９月１日には慰霊祭を開いた。

その木島さんが惨劇について知ったのは数年前。建設機械メーカーを定年退職し、かつて地元で開催されていた草競馬の歴史を執筆したいと思い、調べていく中で虐殺事件の記述に接した。「驚きました。先祖代々この地に住んでいるに知りませんでした。親からも、祖父母からも聞いたことがなかった。周りに聞いても首を横に振るばかり。知った以上、放っておけないと思ったのです」

町内を歩き回り、事実関係を調べる日々が続いた。町広報誌をひっくり返し、「日本、罪なきを罰す」の証言者が町選管委員長の経歴の持ち主であることを突き止めた。１００人とも言われる自警団を組織した旧用土村（現在は合併して寄居町）にも何度も足を運んだ。「事件後、13人の逮捕者を出したところです。皆、沈黙でした。今さら何を、という対応をされたことも。知っていても言えないのでしょう。関係者の子孫はまだこの地で生活しているわけですから。用土に限らない。寄井町にとって不都合な事実なのです。合併した今となっては、共同責任ですから」

静かな口調で続けた。「責任を問うとかではない。町民としてその負の歴史に目を背けず、正しい歴史を継ぎ、具の死を悼む気持ちを持つことが大事だと思っています」

具が滞在していたとされる木賃宿の場所も特定した。正樹院から

北へ約1㌔の同町桜沢だった。

今、追いかけているのは、朝鮮人への差別が厳しかった時代にあって、墓を建立した宮澤菊次郎のことだ。マッサージを生業にしていたと伝わる。１９０２年発行の商業者の名簿に宮澤の名前があるのを確認した。震災当時は具よりもかなり年上だったことも分かった。墓を建てた後の消息は分からない。「具の『日本人――』の悲憤を我がこととして受け止めた宮澤の気概を私は引き継ぎたい」とも話した。

会員は6人で、寄居町民は木島さんのほかは2人。今年中の墓の補修を目標に掲げ、広く町民に募金への協力を呼びかけているがこちらの方も、もう一つのよう。だが悲壮感はない。宮澤と同行二人なのであろう。「１０１年目の今年がスタート元年」。言い聞かせるような口調だった。